論考

地域活性化と連動している大三島分校の高校魅力化

青山学院大学　樋田　大二郎

大三島分校は、正式名称は愛媛県立今治北高等学校大三島分校であり、瀬戸内海のしまなみ街道沿いの大三島にある。大三島は、かつては島の西半分が大三島町、東半分が上浦町の二町に分かれていたが、平成の大合併の折に今治市と合併した。人口は一九四七年（昭和二二年）にピークの二万三千四百人まで達した。その後は減少に転じて二〇一五年（平成二七年）の国勢調査では、およそ五千七百人になっている。

一九四八年（昭和二三年）に愛媛県立大三島高等学校並びに瀬戸崎分校として設立され、その後分校を廃止しつつ募集定員を増やし、一九六三年（昭和三八年）には第一学年募集定員が二百名と最大数になった。

その後は募集定員を減らし、平成一七年には愛媛県立今治北高等学校大三島分校と名称変更し、第一学年募集定員が四〇名となった。

大三島分校の地域に根ざした取り組みは全国の高校魅力化の取り組みのモデルとなるものであるが、取り組みには次の背景がある。

第一は、上述のように島嶼部の高校であることである。島嶼部という条件不利地域に立地しているので、交通の便が悪いこと、人口減少が激しいことが生徒募集を困難にしている。しかしその反面で島嶼部の高校であることは、自然が豊かでマリンスポーツを教育に取り入れることができること、および、地元コミュニティのまとまりがあり地元が強力に高校を支援すること、という長所をもたらしている。

第二の特徴は、廃校の危機と向かい合わせであることである。少子

化による生徒数減少の波が押し寄せる中、各都道府県は高校の再編整備の検討基準を設けている。愛媛県の県立学校再編整備計画基準では、（一）生徒数の減少、（二）生徒の多様化、（三）市町村合併の進行、（四）県財政の悪化の課題を踏まえて、分校は「入学者数が三一名に満たない年が三年続くと翌年度からの生徒募集を停止する」とされている。地元の大三島の中学生数が少ない現状を考えると、三一名は少なくない人数である。

しかし廃校の危機と向かい合わせであることは、大三島分校の長所になっている。いわゆるピンチをチャンスにの言葉通りに、危機感が意欲的な高校改革を可能にし、また、町民の支援を掘り起こして大三島分校の魅力化を促進させている。

大三島分校は、今や先進的で、元気で、地元から愛される魅力的な高校である。第2号に収録した教務主任の吉住牧人先生のご寄稿「愛媛県立今治北高等学校大三島分校における学校魅力化の取組――地域資源及び地域活性化活動を核にした教育活動の実践を通して――」にあるように、大三島分校は「大三島の歴史や文化等の調査・研究」、「地域活性化に関するワークショップ」、「瀬戸内海島嶼部高校の意見交流」、「高校生の手による地域活性化のイベントの立案・実践」を柱に、毎週のように地域活性化の取り組みを行っている。

大三島分校は、県立学校再編計画が示した四つの課題のうち、（一）生徒数の減少については、本土や全国からの生徒募集を行うことで克服している。（二）生徒の多様化については、小規模校であることを長所として一人一人のニーズに対応した教育を行っている。さらに、本土や全国からの生徒が入学することや、全国の高校、地域、組織と交流することで、生徒の学びと進路の可能性は広がっている。カリキュラムが社会に開かれることで、地元地域や都市の多様な素材が教材となっている。（三）市町村合併の進行に関しては、平成の大合併で、大三島にある二町が今治市の一部となった。このことにより、大三島分校は今治市にある一〇校ほどの本校と分校の内の一校にすぎなくなったが、大三島にとっては島に一校の高校である。このため今治市との合併後も大三島の住民は共同体を維持している。生徒インタビューの中に出てきた夕涼み会（夏祭り）の復活は、むしろ共同体の絆が強まっていることを示している。

第三の特徴は、地元が活性化の途上にあり、元気なことである。元気なＵターン者とＩターン者が島で家業を継承したり、起業したりしている。さらに多くの関係人口が島の活性化を支援している。このことは生徒インタビューの中で語られたように高校生も感じており、生徒の地域活性化の取り組みの動機付けともなっている。

夕涼み会は、高校教員を含む元気なＵターン者とＩターン者が飲み会の中で、かつて大三島にあった夏祭りを復活させたいと話が盛り上がったことがきっかけである。メンバーの一人であるＵターン者が語ったところでは、自分が高校時代にお祭りで浴衣を着たのと同じように今の分校の高校生にも浴衣を着させてあげたいと思ったのが夏祭り復活の動機であったという。

こうして、Ｕターン者とＩターン者、高校生が協力して、島民を集めた大イベントが企画・運営された。

さらに、定住者ではないが、世界的建築家の伊東豊雄氏は関係人口として大三島分校の生徒と地域活性化を行っている（前述の吉住牧人教務主任の寄稿文を参照されたい）。

伊東豊雄氏以外にも、ＦＣ今治オーナーの岡田武史氏、サイボウズ社長の青野慶久氏も大三島分校を支援している。

◇

高校活性化と地域活性化は車の両輪である。大三島分校の活性化は地域活性化と連動している。

地元から高校がなくなることは、地元コミュニティにとって重大な損失である。高校生は地域の元気の象徴であり、様々な行事の担い手でもある。高校がなくなると、ＵターンやＩターンへの負の影響があるとも言われている。

さらに、近年の地域の特色を生かした教育では、高校生が地元市町村に出て、市町村の資源の利活用を行うことで地域が活性化されることが分かってきた。地元に地域活性化と連動する魅力化の高校がないことは、高校をエンジンとする地域活性化のメカニズムを作動させることができなくなることを意味する。

都道府県の高校再編整備の運用では、高校が存続することの意義を考えて、ルールの弾力的な運用が行われる。そして、高校の再編整備に至る前に、生徒の全国募集、市町村と県立高校の協働による「高校魅力化」を行う動向が生まれている。その際、高校魅力化の動向を全国規模で牽引（当人たちは伴走という表現を用いる）している団体や仕組みとして、私の知人がかかわっている範囲でいうと、文科省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームの「地域未来留学フェスタ」等の活動、認定ＮＰＯ法人カタリバの「マイプロジェクト」、株式会社プリマペンギーノの公設塾支援などが高校魅力化を牽引している。

大三島分校の高校魅力化で興味深いことは、全国規模のモデルや仕組みを活用することに積極的ではないことである。大三島分校は、文科省の事業への申請をしていないし、マイプロジェクトにも参加していないし、プリマペンギーノの公設塾支援も受けていない。上述の全国規模のイベントやシステムの中では、全国募集のために地域未来留学フェスタへ参加していることが目立つ程度である。

大三島分校を訪問して印象的なのは、大三島分校の独創性、内発性、自主性、積極性であり、それらの結果としての創造性や地域性であった。大三島分校は、地域とのつながりがあり、地域の活性化をエネルギー源にし、普遍的でないし教科書的でないということが特徴である。廃校危機の回避策として、地域の内発的な動向と連動していることや、地元行政や地元住民、そして関係人口である島外の企業・組織などの資源を活用することが大三島分校の魅力化の特徴なのである。前述の吉住牧人先生のご寄稿にあるように、大三島分校は様々に地域とのかかわりを持っている。

◇

『地域人材育成研究』第2号は、大三島分校生徒へのインタビューで得られた資料を掲載し、さらに、同校の吉住教諭からいただいた貴重なご寄稿を掲載した。これらによって、地域との協働による高校教育改革が、生徒にとってどのような意義があるのかを明らかにすること

が『地域人材育成研究』第2号の使命である。インタビュー対象となった生徒は、大三島分校での学びから、自分に自信を持ち、自分を表現し他者とかかわることができるようになった。さらに、地域と触れあう機会を得て、地域からの期待を感じ、地域を好きになり、地域と協働することを好きになった。これらの結果として将来の地域人材としての基礎を形成していた。

最後になりましたが、インタビューに協力していただいた今治北高等学校大三島分校の生徒さん、分校長二神弘明先生、教務主任吉住牧人先生、振興対策課長阿部潤也様他の多くの先生方、地元住民の皆様に感謝いたします。

※なお、『地域人材育成研究』第2号に掲載した写真は大三島分校に提供していただきました。ありがとうございます。

〈参考文献〉

地域教育魅力化プラットフォーム編　二〇一九『地域協働による高校魅力化ガイド：社会に開かれた学校をつくる』岩波書店
愛媛県教育委員会二〇〇八『愛媛県県立学校再編整備計画』
福永健「［ふるさとあしたへ］入学生の全国募集 今治北高大三島分校 廃校危機を回避」『読売新聞』二〇一九年一一月一四日朝刊大阪版　三三面
樋田大二郎　二〇二〇年一月「関係人口になることの背景と意義」『ていくおふ』No．一五八　二八―三三頁
樋田大二郎　二〇一九「町民を本気にさせた発表会：特集　地域づくりと人づくりを押し上げる「高校」～〝魅力を発信〟地域の中心に高校がある～」『舞たうん』一三九号　公益財団法人えひめ地域政策研究センター　一―五頁
樋田大二郎　樋田有一郎　二〇一八『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト：地域人材育成の教育社会学』明石書店
樋田有一郎　二〇二〇「高校魅力化における『地域の特色を生かした教育』のあり方を考える―学習目標と学習効果の整合性に着目して―」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊　二七号二　早稲田大学大学院教育学研究科　五一―六三頁
吉住牧人　二〇一九「地域を愛し地域から愛される学校を目指して：特集　地域づくりと人づくりを押し上げる「高校」～〝魅力を発信〟地域の中心に高校がある～」『舞たうん』一三九号　公益財団法人えひめ地域政策研究センター　一―五頁、一四―一五頁